



Title	メタ構想力 : ヴィーコ・マルクス・アーレント
Author(s)	木前, 利秋
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57723
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	木 ^き 前 ^{まえ} 利 ^{とし} 秋 ^{あき}
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 23433 号
学位授与年月日	平成21年12月2日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	メタ構想力ーヴィーコ・マルクス・アーレント
論文審査委員	(主査) 教授 春日 直樹 (副査) 教授 友枝 敏雄 教授 ヴォルフガング・シュヴェントカー

論文内容の要旨

本論文は、創造・制作・労働など人間の〈作る〉営みについて、ヴィーコ・マルクス・アーレントがどのような理論を展開してきたのかを思想的に分析し、作るという人間の営みの歴史的・今日的な意味について新たに考察することを主題にしている。人間がモノを生産したり、記号やシンボルを創造したりする営みには、そのプロセスや目標について必要な事柄を知る営みがともない、そこには人間が歴史を「作り」「知る」営みも含まれる。この点に注目したのがヴィーコとマルクスである。神話的世界の担い手たちによる神観念の創造と政治的世界の創出における〈作ること〉と〈知ること〉の結びつきを、歴史の語り手が認識する可能性の条件は何かを問うたのがヴィーコだったのに対し、近代的世界の当事者たちによる生産と活動における〈作ること〉と〈知ること〉との結びつきを、歴史の観察者が正当に認識する可能性は何かを論じたのがマルクスである。両者の考えには、歴史を作った人間こそが歴史を知ることができるという近代的歴史観が表れている。これに対しアーレントは、人間の営みには（労働や制作といった）〈作ること〉に還元できない幅があり、歴史の担い手たちによる知的営みにも作ることにともなう知る活動に限定されず、そうした歴史の認識者にとって、真に歴史を認識する可能性は、そうしたより広い幅に目を配ることしか表れてこないことに注目した。本論文の第一部ではヴィーコを、第二部ではマルクスを、第三部ではアーレントを取り上げる。

第一部・第一章では初期ヴィーコのトピカ（発見術 *ars inveniendi*）とクリティカ（判断術 *ars iudicandi*）の概念、および「真理 *verum*」とは区別された「真らしきもの *verisimilis*」の概念にかんする解釈を試みる。トピカとクリティカは従来相互に対立する概念とされ、ヴィーコはデカルト主義的な「新しいクリティカ」に伝統的な「トピカ」の方法を対置し、真理よりも真らしきものの意義を強調したとの理解がなされてきたが、ヴィーコ自身のテキストからは、むしろ彼がトピカとクリティカのあるべき関係を模索していたこと明らかにする。真理と真らしきものもそのあるべき関係にもとづくならば、真なるものが発見され判断されるプロセスにおける異なった二つのあり方と理解可能であることを論じる。

第二章では、クリティカより歴史的に先に現れたとされる感覚的トピカによって、太古の「最初の人間たち」が神々や英雄の形象を「想像的普遍」として〈作りだし〉、そのことで自然や人間の事象を〈知る〉プロセスについてヴィーコがどのような思索をなしたのかについて整理する。そのさいトピカによる想像的普遍の造形が諸々の事象に同一性を与えてその存在を感覚的に推理する操作として働くこと、その推理が述語的同一化による隠喩的な意味の発見であること、それゆえ神々・英雄の形象である想像的普遍は、隠喩的に発見された意味類型としての固有名であることを説明する。

第三章では、近代人にとっては理解することも想像することも難しい太古の人びとの神話的世界の創造をいかに認識

するかについて、トピカとクリティカ概念、哲学と文献学の方法を駆使してヴィーコがどのような方法論を展開していたのかについて考察する。ヴェリーンの解釈によれば、太古の人びとが彼らの歴史的世界を創造し、その世界の出来事について神話的に物語るために彼らの「集合的な想像力 collective fantasia」を発揮したのに対して、ヴィーコは、太古の人びとのコレクティブなファンタジアの産物に対して、彼自身の「想起的な想像力 recollective fantasia」を駆使してそれを理解し認識しようとする。こうしたリコレクティブなファンタジアは、いわば想像力の想像力、メタレベルにある想像力で、本論文でいう「メタ構想力」の一つである。ここではこの概念の意義を「家族的類似性」にかんするスペルベルの人類学的な解釈を手がかりにして明らかにする。

第二部では、マルクスの労働概念の再解釈というよりも、その新たな再構成に向けた試みをおこなう。ヴィーコとマルクスはいずれも何らかのかたちで〈作ること〉のあり方にかかわりながら、〈知る〉という表象作用を生活世界の地平との結びつきでみていた。ヴィーコがそれを象徴的創造の位相において知の発見の脈絡に置くのに対し、マルクスはそれを物質的生産の位相において知の適用の脈絡で見ると。そのさいマルクスは、労働が人間特有の営みである理由として、労働する者が労働の成果の表象を予め頭のなかに描くことを挙げている。第四章では、マルクスのこの考えについて、意図 intention にかんするアンスコムの見解を手がかりにしながら、労働を〈未来指向的な意図の形成〉〈意図的な行為〉〈ある意図をもって行為すること〉の複合的な契機で捉える理論的再構成の可能性を探る。第五章では、労働の目的をあらかじめ表象することに人間固有の特徴を見た点について、(霊長類学・深化人類学・認知考古学など)今日の複数の科学的な知見に照らすならば厳密さに欠けることを指摘し、たとえば道具操作に見られる類人猿の高い能力との違いを考えるならば、たんに労働の成果をあらかじめ表象するだけではなく、認知的知能と技術的知能を統合するメタ表象作用(スペルベル)に人間固有の特徴を見るべきことを論じる。メタ表象作用はメタ構想力の一部である。第六章では、人間においては道具操作が言語操作と組み合っている点に注目して、技術的知能と結びついた道具的行為が特定の社会的知能の発達を前提にして成り立つことを明らかにする。ことに類人猿のエミュレーション学習とは区別されたヒトの模倣学習の進化論的な意義について論じ、メタ表象作用が道具を操作する人間にとって、いわゆる「マキャベリの知能」を超えた社会的知能が不可欠であることを指摘する。

第三部では、アーレントの活動的生活論における労働と制作の概念について批判的な検討をおこなう。第七章では「労働 labor・制作 work・活動 action」の三つからなる彼女の活動的生活論が、全体主義以後、東西冷戦体制以後、プラトン主義以後、従来の政治学以後という四つの「以後 post-」について歴史的展望を与える射程を持っている点にそのアクチュアリティを求め、その意義に触れる。第八章では、アーレントの労働と制作の概念の問題点についてそれぞれ必然性と暴力との関連で明らかにする。労働概念については、社会的な生活の必要性(当為としての必要性)を生物学的な生命の必然性(事実としての必然性)に還元して理解する強い傾向が、アーレントにおいて労働概念の一面的な理解につながっていることを明らかにする。制作概念については、暴力的性格が制作に必然的にもなうとされたために、その「暴力性」と制作された物の「耐久性」との微妙な差異を的確に捉えることに成功していない点について、「法律の安定性」にかんするアーレントの見解をその例として検討しながら説明する。第九章では、アーレントの歴史概念をサイドの歴史概念と比較しながら、その意義と可能性を考察する。そのさい両者がヴィーコの歴史観をどのように批判し評価したのかに触れることで、ヴィーコの歴史概念が思想的に持った意義についても論じる。

論文審査の結果の要旨

本論文の主題であるメタ構想力とは、メタ次元における構想力を意味する。もっとも典型的には、過去の時代に生きた人々や遠い場所に住む他人など、いわゆる不在の他者が何を構想したかに関しての自己の構想力としてあらわれる。私たちが周囲の人たちとともに営む日常生活も、このメタ構想力を発揮することではじめて成り立つ。申請者の木前氏は、メタ構想力を社会科学者ルーマンのようにシステム論の語法で定式化することをしりぞけて、ヴィーコ、マルクス、アー

レントという3人の思想を読み解くことにより、創造的な議論を展開する。これまで木前氏は、3者に関するすぐれた研究成果を刊行してきたが、本論文はその業績をメタ構想力という重要な論題を掲げて集大成したものである。

論文は3部から成り、第1部はヴィーコ、第2部においてマルクス、第3部ではアーレントが論じられて、後半になるに従い3者のメタ構想力に関する考察が対比され織り合わされていく。この展開は、3者を貫く人間の「作ること」と「知ること」への洞察を基軸に据える構成によって、いっそう洗練度を増す。「作ること」と「知ること」とは、ヴィーコの場合、神話的世界における神の観念と政治世界との創造を、地理的・時間的に遠く隔たったわれわれがどのような条件下で認識しうるのであるのか、という形で提起されている。マルクスの場合、労働に焦点を当てた物質的生産の位相から、歴史を観察する者にとつての認識の限界と可能性が論じられている。アーレントでは、人工物だけでなく生きとし生けるものを含む世界において、不在の他者をいかに再現前化(=再表象化)させるかという問いとして提示される。18世紀のヴィーコ、19世紀のマルクス、20世紀のアーレントは、それぞれの時代に於いて「作ること」と「知ること」の問いを立てながら、いかに不在の他者を表象するのか、他者による表象を表象できるのかという論題をわれわれに突きつけているのである。

3者によるメタ構想力の洞察は、こうした「作ること」と「知ること」の観点から導き出すことができる。ヴィーコは、人間の作成能力の限度と認識の限界とを神に対比させて確認したのち、真理を発見し判断する方法として「想起的な想像力」を駆使した。マルクスは人間特有の営みとしての労働を注視したが、この視点を現代の霊長類学・記号学・言語学などに即して展開させるならば、不在の経験を経験する能力へと収斂する。そしてアーレントは、人間の制作に内在する暴力性を強調しつつ、構想力の挫折する経験を想像できる能力を、あたらしい世界の始まりと重ねている。

以上のように、本論文には木前氏特有の重厚でエレガントな議論、それを支える鋭い洞察力と深い学殖が十分に発揮されている。本論文を審査担当者たちが完全に理解できたか否かはともかく、人間科学研究科に提出された学位論文の中でもっとも高水準の一つであることは間違いない。